

生物多様性ふくおか戦略策定経緯

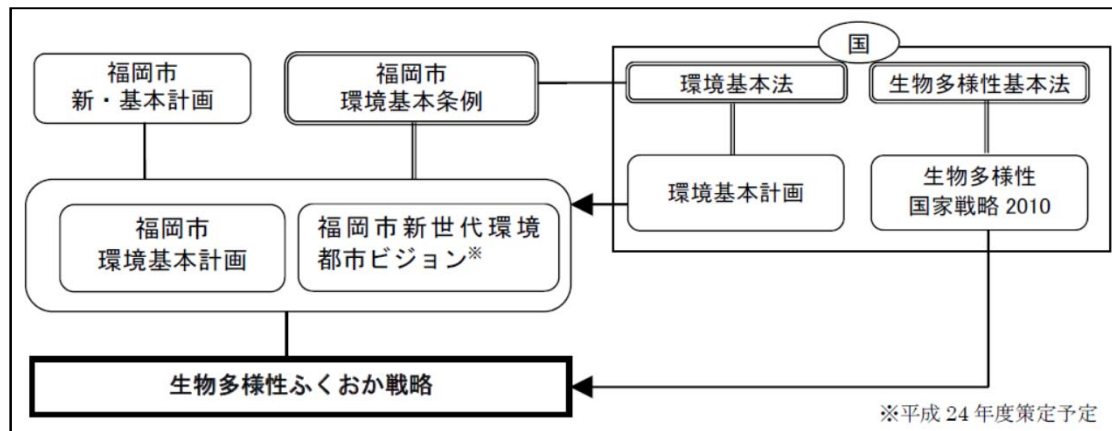
**平成24年5月
福岡市**

1. 生物多様性ふくおか戦略のねらいと位置づけ

■ 戦略策定のねらい

- 現在の福岡市の個性・魅力は、その多くが生物多様性から受ける生態系サービスによって支えられてきたものであり、これら生態系サービスの持続的利用を支える生物多様性を維持・向上していくことは、都市の魅力を増進していくことにもつながっていくものと考えられます。
- 「生物多様性ふくおか戦略(以下、「本戦略」という。)」は、上記の事項を踏まえ、福岡市における生物多様性のあり方を考え、将来にわたって継続的にその恵みを享受するための市域ぐるみの行動計画を策定するものです。

■ 戦略の位置づけ



■ 戦略の期間

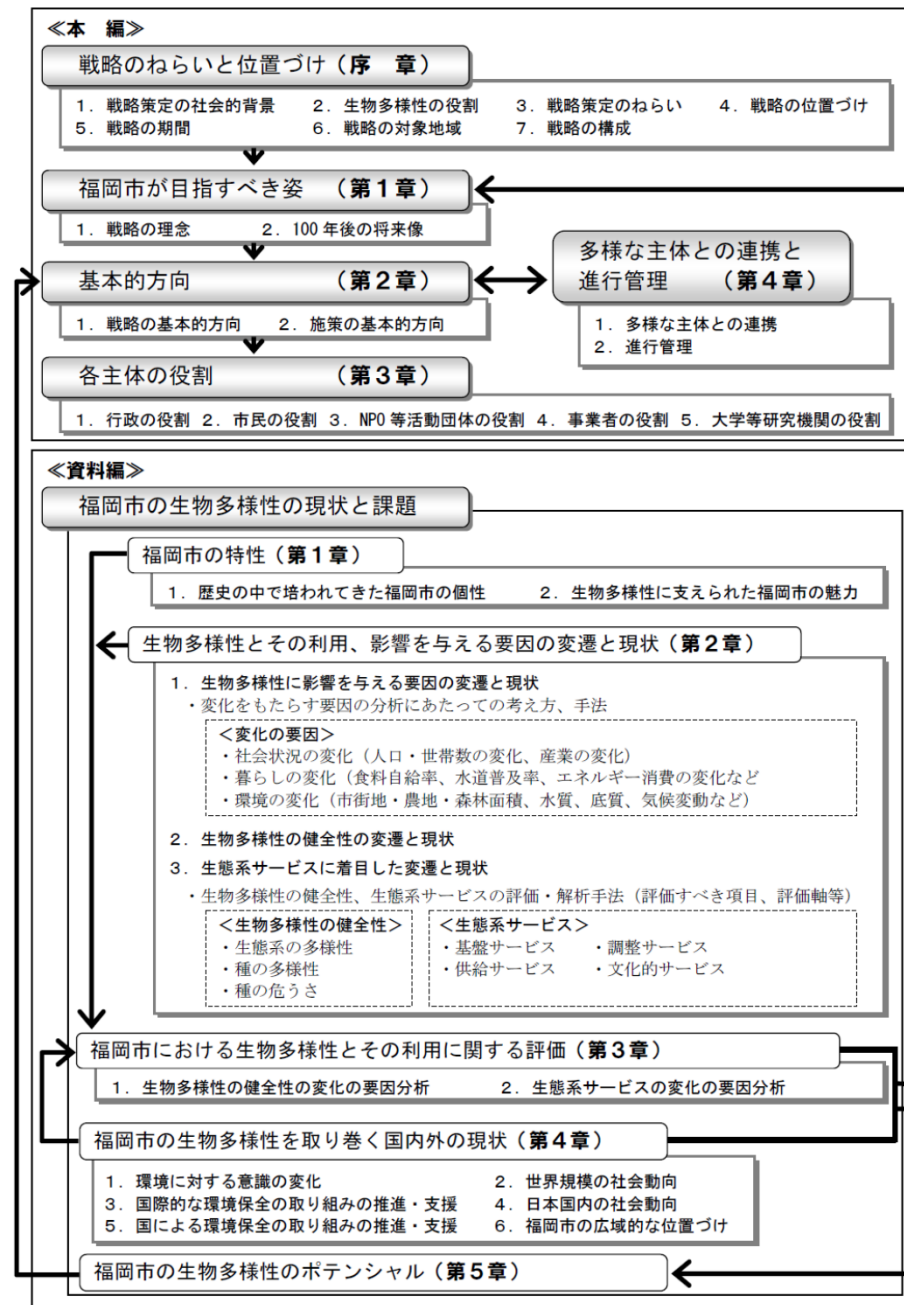
- 上位の「生物多様性国家戦略2010」の考えに基づき、本戦略の期間も100 年間とし、長期目標の100年後を見据えつつ、当面10 年程度の取り組みをとりまとめます。
- 自然環境や社会情勢の変化に対応するために、10 年程度を目処として、見直しを行う予定とします。

■ 戦略の対象地域

- 本戦略の対象地域は、福岡市新・基本計画の対象とする福岡市全域とします。
- 生物多様性に関する問題は、山地の連なりや河川の流域など行政区域の外側とも密接な関係を持つほか、野生生物、人、ものの移動を介した国内外の生物多様性への影響なども考慮する必要から、対象地域を越え、広域に視野を広げた取り組みも検討します。

1. 生物多様性ふくおか戦略のねらいと位置づけ

■ 戦略の構成



2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生物多様性の健全性の変化の要因分析

項目			変化の方向	変化の状況・要因
生物多様性の健全性	生態系の多様性	陸域生態系	↓	・林業の衰退による人工林の管理不足や、竹林の拡大等による生態系の質の低下 ・市街地における開発の継続と、郊外部での人的資源の不足
		沿岸・海洋生態系	↓	・沿岸部の埋立やアイランドシティの開発などの環境改変 ・国内外で人間活動によって海に排出されるプラスチックごみ等の漂着ごみによる海岸環境の悪化 ・地球温暖化に伴う海水面の上昇により、沿岸域に位置する砂浜や干潟などの水没の可能性 ・外洋域については、海底資源の開発などによる影響や船舶の事故による油汚染などの可能性も
	種の多様性		↓	・開発や人の自然への働きかけの減少 ・都心部への人口集中に伴う緑地などの点在する住宅地から商業地や住宅密集地への変化 ・博多湾の水質・底質の汚濁 ・世界的な環境の変化や外来種の侵入の影響 ・漂着ごみによる海岸環境の悪化 ・県内におけるシカの分布域の拡大
	種の危うさ		↓	・中小河川などに生息する魚類は、河川改修とそれに伴うコンクリート護岸化による河床構造の一樣化や水際植生の減少 ・底生動物などでは砂浜の消失と博多湾の水質・底質の汚濁 ・圃場整備による環境の分断 ・特定外来生物の影響

2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生態系サービスの変化の要因分析(1) 基盤サービス

項目		変化の方向	変化の状況・要因
基盤サービス	水の循環	—	・土地利用の転換による森林生態系や農地生態系の減少に伴う自然被覆面の減少、人工被覆面増加による雨水の河川への直接流入量の増加(水循環のプロセスの変化) ・下水道の普及や高度処理施設の導入に伴い、博多湾に流入する栄養塩類の成分バランスの変化(窒素／リン比の上昇) ・栄養塩類のバランスの変化に伴い、赤潮を発生するプランクトンの種構成が変化し、植物プランクトンの種構成が変化 ・外洋域の水循環等については未だ不明な点が多い
	栄養塩類の循環	—	
	土壌形成	—	
	一次生産	—	

2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生態系サービスの変化の要因分析(2)調整サービス

項目		変化の方向	変化の状況・要因
調整サービス	大気質の調整		・森林生態系・農地生態系が著しく減少し緑被地が減少
	気候の調整		・森林生態系・農地生態系の減少による緑被率の低下 ・中央区から博多区を中心とした市街地における緑地の減少やヒートアイランド現象の進行
	水の調整 (洪水の抑制)		・森林生態系・農地生態系の減少による自然被覆面の減少し、水の調整機能が低下 ・間伐されていない人工林では、土壌侵食が発生するなど、水上保全機能が低下し、土壌の流出や大雨による濁水発生、土砂崩れ発生の可能性
	土壌浸食の調整		・市内の河川は、河川勾配が急で流路延長も短く、流出速度が速いため、河川の硫化能力が潮位の影響を受けやすく、水害が起こりやすい ・自然被覆面のほとんどない市街地では、集中豪雨による雨水が地下に保水されず、一気に河川に流れ込み、都市型水害が発生しやすい
	水の浄化		・埋立による砂浜の消失や河川のコンクリート護岸かによる水際植生の減少により浄水機能は低下 ・下水道や浄化施設の充実により汚濁負荷が低減され、また、覆砂による底質改善や干潟耕運など、新たな試みがなされており、長期的にはサービスが増加と予測

2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生態系サービスの変化の要因分析(3) 供給サービス

項目		変化の方向	変化の状況・要因
供給サービス	穀物		・食生活の多様化、米の需要の低下、第一次産業の衰退に伴う農地の宅地への転用による水田面積の減少 ・農家の高齢化と後継者不足による農業従事者の減少、耕作放棄地の増加 ・世界的な人口増加による食糧需給の切迫や地球温暖化による穀物生産能力の低下による海外からの供給サービス料の低下の可能性
	農産物 (穀物以外)		・農家の高齢化と後継者不足による農業従事者の減少、耕作放棄地の増加 ・世界的な人口増加による食糧需給の切迫や地球温暖化による穀物生産能力の低下による海外からの供給サービス料の低下の可能性 ・イノシシの増加による農産物への被害や、全国各地で農産物被害の大きいアライグマの侵入について留意が必要
	水産物		・第一次産業の衰退に伴う漁業従事者数の減少 ・水深の浅い博多湾における温暖化の影響 ・沖合漁業については特に中国での魚介類の需要の増加、資源の過剰利用 ・博多湾の水質汚濁
	木材		・海外からの安い木材の輸入、国内材の需要の低迷、林業従事者数の不足、林業の衰退

2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生態系サービスの変化の要因分析(3) 供給サービス

項目		変化の方向	変化の状況・要因
供給サービス	バイオマス燃料	→	・林業生産の低迷 ・畜産生産量、穀物生産量の減少 ・下水汚泥のバイオマス発電・バイオマス熱利用として消化ガス発電設備が稼働中
	淡水	→	・市域を含め、福岡県の全体での森林面積に大きな変動はなく、森林の水源涵養機能は安定 ・林業の不振による森林の管理不足で、森林生態系の質が低下し、森林の下層植生や土壌が発達しなくなることが考えられ、保水機能の低下が懸念

2. 福岡市における生物多様性とその利用に関する評価

■ 生態系サービスの変化の要因分析(4) 文化的サービス

項目		変化の方向	変化の状況・要因
文化的サービス	文化的多様性	↘	・第一次産業の衰退や人口の流動化による福岡の歴史伝統文化への理解・認識の希薄化、地域コミュニティの崩壊
	教育的価値	→	・農地生態系の減少や人の手が入らないことによる二次的自然の減少による田畑や里山等の身近な自然が減少 ・山や海での自然体験学習の機会が設定
	審美的価値	→	・審美的特徴が認められる場所は、自然公園や文化財(名勝)に指定され、価値が認知されるとともに、適切な保全が図られ、観光資源としての価値が向上 ・海の中道などでは、漂着ごみの増加等による景観への影響
	文化的遺産価値	→	・文化的価値が認められる物件については、文化財(天然記念物)に指定され、価値が認知されるとともに、適切な保全が図られている
	レクリエーションとエコツーリズム	→	・市街地から、海岸や山、河川へのアクセス性もよく、和白干潟などの自然海岸など、多様な自然レクリエーションのフィールドが残されている ・市の周辺部にも市街地から車で一時間の場所に玄界灘の海の自然が広がっている ・生物多様性の健全性が低下しており、これらのサービスを提供する生態系の減少、劣化にともない、将来的には、サービス低下の可能性

3. 福岡市が目指すべき姿

■ 戦略の理念

- ①すべての生命が存立する基盤を整える
- ②人間にとって有用な価値を持つ
- ③豊かな文化の根源となる
- ④将来にわたる暮らしの安全性を保障する

■ 100年後の将来像

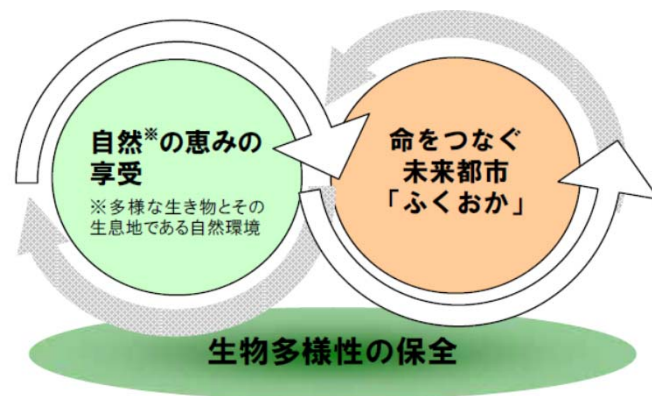
【全体目標】

遥かにつながる玄界灘、筑紫野を流れるいく筋もの清流、立花山の山懷、仰ぎみる脊振の峰。

過去二千年にわたってそこに人々が生きてきた足跡を残すまち。

人々は自然と共生し、生物多様性の恩恵に支えられ、まちは発展をとげました。

市民が多様な生き物とその生息地である自然環境の
保全・再生・育成に取り組み、
百年後も豊かな自然と共生し、その恵みに支えられ、
命をつなぐ未来都市「ふくおか」



【地域別目標】

《地域特性区分》

- ①海洋域
- ②島しょ部
- ③沿海部(自然的地域)
- ④沿海部(中心市街地・港湾地域)
- ⑤内陸部(市街住宅地域)
- ⑥内陸部(里地里山・田園地域)
- ⑦内陸部(山地・丘陵地域)
- ⑧河川部

3. 福岡市が目指すべき姿

■ 海洋域：博多湾及びその外側に広がる筑前海などの外洋域

【現状】

- ・博多湾は、水質、底質ともに改善傾向にあるが、港湾開発にともなう漁業権の消失、主幹漁業であったノリ養殖など沿岸漁業の生産量は大きく減少
- ・外洋域は人為的な影響を受けにくく、日本近海においても、これまでは大きな改変はなかったと考えられる
- ・今後は、海底資源の開発などによる影響が懸念
- ・博多湾では、船舶の航行も盛んであり、船舶事故による油汚染の発生なども懸念
- ・本市の漁業生産量の60%を占める沖合漁業では、福岡近海における資源量は減少傾向、さらに、諸外国での魚介類の需要増加が見込まれ、資源の過剰利用の継続が懸念



【目標とする姿】

- 美しい博多湾に育まれた、質の高い姪浜産ノリや志賀島産ワカメなどが市内はもとより、全国から人気を集めています。
- 韓国や中国、さらには太平洋諸国などの関係国の連携により、各国の海を回遊する魚類などの生息の場が守られ、乱獲などから海洋資源が守られ、全ての国の食卓に、将来にわたって美味しい魚介類がのぼるように注意が払われています。
- 海の生きものの生息環境を脅かす海洋汚染や気候変動が、世界中の国々の積極的な取り組みによって最小限に抑えられています。
- 近海もののサバ、アジ、イカなど、豊かな水産資源の恩恵に預かり、本市の魅力の一つである豊かな食文化を守っています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 島しょ部：能古島、玄界島、小呂島、さらには陸繋島の志賀島など沿岸域・海洋域にある島々（陸域）

【現状】

- ・ 岩礁や砂浜など多くの自然海岸が残っている
- ・ 人が住んでいる島は、南側斜面を中心に山頂近くまで土地利用がなされていたが、近年は多くの島で中腹以上の農地が放棄、二次林として森林が回復
- ・ 強い季節風にさらされる北西側斜面は、自然林として保全されているところが多い
- ・ 植物や昆虫類をはじめとして多くの絶滅危惧種がみられるほか、小呂島のハチジョウススキ群落や玄界島のハマオモト群落など、貴重な植物群落がみられる
- ・ 能古島のおくんちなどの独自の伝統行事や風俗、文化が残されているほか、新鮮な魚介を活かした志賀島の朝市などが行われている



【目標とする姿】

- 能古島、玄界島、小呂島、志賀島など大小さまざまな島々では、固有の生きものや文化の多様性が守られています。
- それらの島々には、岩礁や砂浜など自然のままの海岸が残され、ハチジョウススキ群落やハマオモト群落など、そこでしかみられない貴重な植物をみることができます。
- 能古島や志賀島などでは、伝統行事が世代を超えて受け継がれています。
- 素晴らしい自然の風景美や貴重な生きもの、島ならではの文化や新鮮な海の幸が多くの人々をひきつけ、エコツアーなどが人気を集め、多くの人たちが島の人たちと交流し、固有の生きものや文化などの保全に一役買っています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 沿岸部(自然的地域): 今津干潟、和白干潟、長浜海岸、海の中道等の砂浜などの陸域と汽水域などのエコトーン(移行帯)を含む地域

【現状】

- ・沿岸部の埋め立てや、都市開発や下水道の整備による河川流量の減少や土砂供給の減少などにより、博多湾内の干潟や砂浜などに影響
- ・多くの河川に堰が整備されているため、生きものの貴重な生息・生育空間である汽水域は瑞梅寺川や多々良川の河口などの一部
- ・外海に面する海岸・海域には、自然海岸が多く残る
- ・博多湾内は閉鎖性が高く、富栄養化に伴う有機汚濁、赤潮の発生や貧酸素水塊の発生や、漂着ごみによる海岸環境の悪化
- ・河口域を中心に鳥類の渡りの中継地・越冬地としての機能も果たす干潟が分布
- ・NPO 等活動団体などが干潟や海岸の環境保全に向けた取組を推進
- ・レクリエーション施設が集積し、自然体験などの環境学習が盛んな海の中道や、海岸景勝地として魅力的な観光スポットとなっている玄海国定公園に指定される玄界灘沿岸などがある



【目標とする姿】

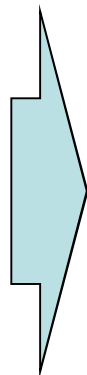
- 市民、NPO 等活動団体、事業者など多くの人の手によって砂浜や干潟などの自然海岸や河口の汽水域が守られ、貝類やカニ類をはじめとした多様な海生生物やカブトガニなどが観察できます。
- 行政やNPO 等活動団体などが、国内外の鳥類の中継地や越冬地の団体と連携しながら、鳥類とその生息環境を守る活動を積極的に展開し、国内有数の渡りの中継地・越冬地となっており、野鳥公園などでは多くの人が、バードウォッチングを楽しんでいます。
- 流域一体で水質改善に取り組むことで漁場が確保され、各国との協力によりごみのないきれいな砂浜などの海岸線を再生し、多くの市民が潮干狩りや海水浴を楽しみ、多くの観光客が美しい自然の海岸線に魅了されています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 沿岸部(中心市街地・港湾地域): 中世以降、埋め立てられてきた市街地、港湾施設をはじめ、レクリエーション施設や住宅、文化施設など、多様な機能が高度に集積した沿岸地域

【現状】

- 本市面積の約8%を占める埋立地を中心に市街地が形成され、高密度な土地利用、高い環境負荷の集中により、多様な生物が生息・生育できる自然空間は極めて少ない
- 緑地が少なくアスファルトなどの人工地盤面で覆われており、ヒートアイランド現象が発生
- 身近に緑地が少なく生物多様性に乏しいために、生物の多様性の大切さや自然と触れ合う機会の減少
- 港湾地域では、埋め立てによる自然海岸の減少



【目標とする姿】

- 人口の減少にあわせた土地利用政策が行われることで、都市的土地利用の集約による市街地のコンパクト化が進み、それによって創出される郊外部の空地が、環境再生の種地や拠点として緑地などが整備されています。
- 道路には大きな街路樹が並び、市街地を流れる河川に沿って幅の広い緑の帯が形成され、ビルの屋上や壁面も豊かに緑化され、大都市とは思えないほど野鳥のさえずりが身近に聴こえます。こうした緑は、都市に新鮮な風を送り込み、風格漂う街並みを形成するとともに、都市生活に潤いを与えています。
- まちの多くの場所にビオトープが生まれ、子どもから大人まで地域の人たちが協力して手入れをしています。そうした活動を通して、子どもと大人が、生物の多様性の大切さや自然との付き合い方などを一緒に学んでいます。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 内陸部(市街住宅地域): 平野部や、散在する小高い丘陵に、面的に市街地、住宅地が広がり、わずかに樹林地が点在する地域

【現状】

- 1960年代以降に、田畑や樹林から住宅地などの都市的な土地利用に転換された地域で、都市公園や街路樹によって緑が創出されているものの、緑が大きく減少
- 敷地の細分化などにより、敷地に残された貴重な緑が減少
- 外来種を緑化植物等に利用することにより外来種がはびこっている
- 内陸部の市街地化により、まとまっていた自然的環境が分断され、キツネなど生息に広い面積を必要とする生きものや、ニホンアマガエルなど複数の環境を行き来する生きものが減少



【目標とする姿】

- 丘陵や崖線、河川沿いに緑地が帯状につながり、多くの生きものが往来しています。そうした緑地が風の通り道になって、市街地に新鮮な風を運んでいます。
- 市街地には、比較的大きな社寺林や鎮守の森、屋敷林が残され、ムササビが巣を造り、フクロウの鳴き声が聞こえてきます。家々には緑が植えられ、コゲラやシジュウカラなどが羽を休めています。
- 先人が創り、残してきた社寺林や鎮守の森、さらには公園の緑を地域の人たちが協力して手入れをしており、そこでは、子どもたちが土の上をかけ回っています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 内陸部(里地里山・田園地域):農地、ため池、住宅地、小規模な樹林地などが混在する、山地丘陵部の自然地域と沿岸部の都市的地域の中間的な地域

【現状】

- 各地の山麓、丘陵部で見られたアカマツ林などの二次林は、薪炭などの用途がなくなり衰退し、潜在植生である照葉樹林へと遷移
- 農家の高齢化や後継者不足、農業所得の低迷などから農業従事者は年々減少し、農地の宅地化により、水田環境が著しく減少
- 里地里山として人に利用されることにより多様な植生を維持していた環境が減少し、移動能力が低く特定の環境に依存している植物や昆虫類などが減少
- 鴻巣山などでは、NPO 等活動団体などにより、新たな里山文化を創造しようとする取り組みが推進



【目標とする姿】

- 市街地近郊の里山の一部では、市民、NPO 等活動団体、事業者などさまざまな人々の協力で二次林が手入れされ、キキョウやリンドウなどの植物や、かつて姿を消したチョウ類などの姿もみられます。
- かつて林業従事者の高齢化にともなう山の荒廃が懸念された飯盛山や叶岳では、市民、NPO 等活動団体、事業者などと行政の共働によって、手入れの行き届いた森林として、子どもたちの冒険の場、大人の自然観察の場、生物の多様性の大切さを学ぶ場などとなり、多くの人を楽しみを分かち合い、新しい里山文化が形成されています。
- 福岡市内産の農産物が、市内をはじめ国内外に出荷され、安定的な農業が行われ、環境保全型農業の採用によって、さまざまな生きものが田んぼや畑にみられます。
- 子どもから大人まで、里地里山の大切さを十分に理解し、保全への取り組みが、引き継がれています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 内陸部(山地・丘陵地域): 脊振山地、油山などを代表とするままとりのある森林で、一部は自然公園に指定され、中でも金山のアカガシ純林や脊振山のブナ林などが残される比較的自然性の高い地域

【現状】

- 多くの生物の生息地であるが、イノシシなど一部の種の個体数の増加や生息域が拡大しつつある
- 森林面積が安定的に保全されている一方で、天然林の減少や林業の衰退などにより人工林の施業や管理が十分に行き届かず、放置林が増えている
- 脊振山や油山などは、レクリエーションやエコツアーを行うことができる場として充実しているが、脊振少年自然の家、油山市民の森などの利用者は減少傾向



【目標とする姿】

- 脊振山や金山の山頂付近の森厳なブナとシデの林から、アカガシやシイ・カシの林へ登山ルートを下ってくると、野生ランなどの貴重な植物や四季折々の草花が迎えてくれます。登山道からノウサギやキツネの姿を発見することもあるでしょう。
- 豊かな自然環境を保全していくために、市民、NPO 等活動団体、事業者などが協力して、ボランティア活動が展開されています。
- 市街から1 時間足らずのこうした山々では、多くの市民がハイキングやキャンプなどを気軽に楽しみ、子どもから大人まで、さまざまな人たちが、生物の多様性について学ぶ場として活用しています。また、福岡のまちに訪れた人たちも、ちょっと足をのばしてエコツアーに参加しています。
- 行政やNPO 等活動団体の人々が、適正な利用方法の情報を提供したり、ルールを定めたりしながら自然環境を守っています。
- 森林は水源かん養林として、用地を取得し、間伐や造林などの整備が進み、水源かん養機能も向上しています。

3. 福岡市が目指すべき姿

- 河川部：多々良川、那珂川、室見川などの大きな河川から、中小の河川を含めたさまざまな地域や生息生育環境を結びつける生態系ネットワークの軸となる水系

【現状】

- ・都市部を流れる河川では、都市化の進行やコンクリート護岸化、堰の建設などにより環境のつながりが分断
- ・貴重な生物の生息空間である干潟の減少や複数の環境を行き来する生物が減少し、外来種が増加
- ・下水道の普及によって水質は改善傾向
- ・魚道の設置など環境のつながりや生態系に配慮した環境整備が実施
- ・多々良川、那珂川、室見川などの河川は、生活用水の供給源であるほか、室見川のシロウオなど、地域の食文化を支える食材の供給源として機能
- ・室見川などは、自然観察など多様な自然レクリエーションのフィールドとして活用
- ・シロウオの生産量は、最盛期と比べると3分の1程度



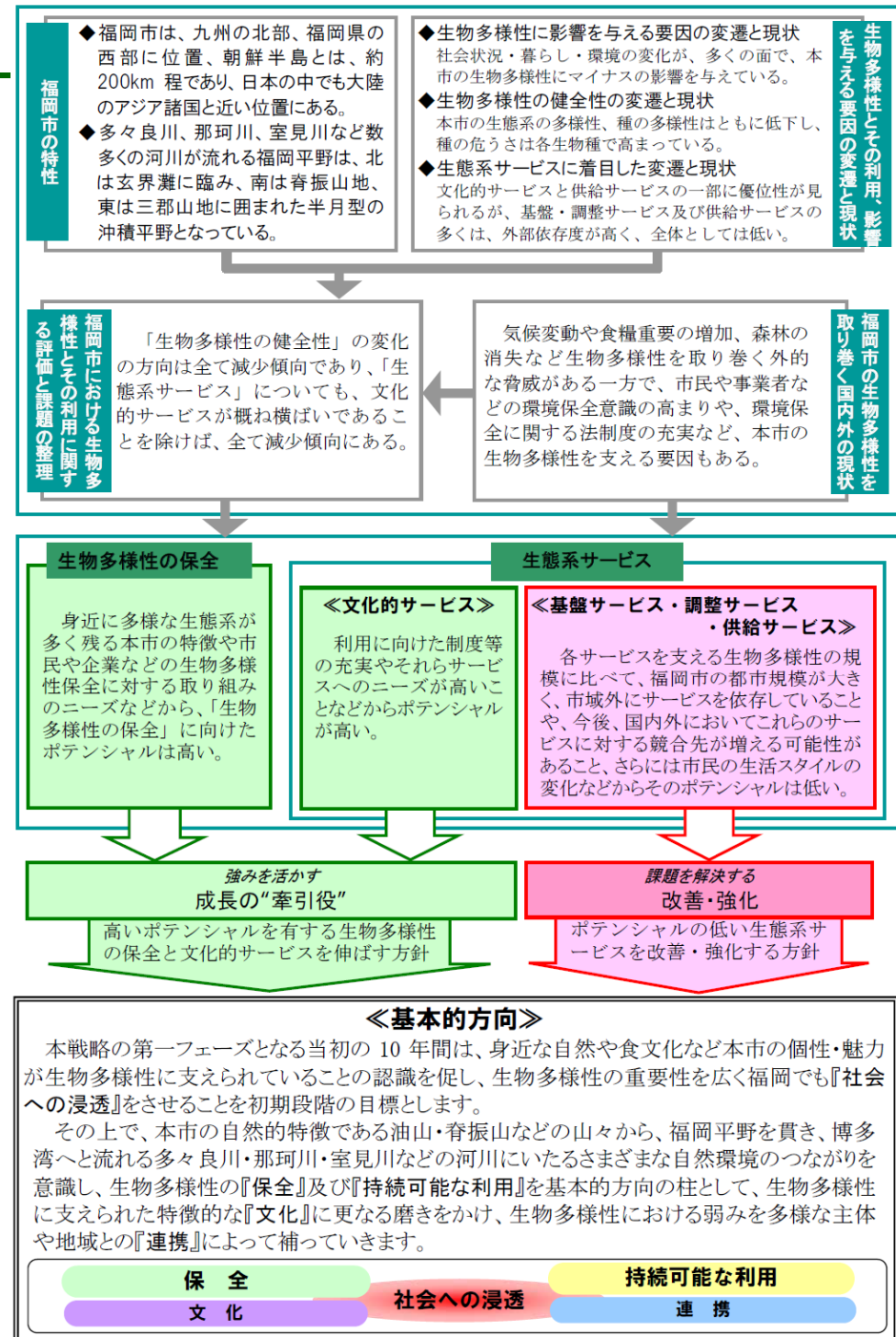
【目標とする姿】

- 多自然川づくりによって出来た入り江の淀みに、コウホネなどの浮葉植物がみられるなど、河川敷にはさまざまな生きものの生息場所が生まれています。
- 室見川などに設置された魚道を遡上するアユを子どもたちが観察しています。田んぼでは冬でも水路に水が流れ、多くの生きものが川と水路を行き来しています。
- 小河川や水路では、かつての潤いを取り戻し、多くの野鳥や昆虫などの姿を見ることができます。
- 河川では、NPO 等活動団体などが、外来種の駆除を行っており、在来種ニッポンバラタナゴやメダカなども増えてきています。
- 源流部から河口部まで清らかな水が流れ、生態系が確保され、春先にはシロウオ漁が行われ、福岡ならではの風物詩と食文化が継承されています。
- 浅瀬では多くの子どもたちが遊び、大人たちが川の流れに糸をたらしています。

4. 基本的方向

■ 戦略の基本的方向

- 社会への浸透(初期段階目標)
- 保全
- 持続可能な利用
- 文化
- 連携



4. 基本的方向

■ 施策の基本的方向

基本的方向1 生物多様性やその恵みに関する認識の社会への浸透

方向①: 市民が生物多様性を理解し、その保全の重要性を認識し、行動できるように生物多様性を広く社会に浸透させます

【主な施策】

- 生物多様性の重要性の理解を促進します
- 生物多様性に関する教育・学習を推進します
- 生物多様性の調査研究を推進します

方向②: ふくおかの魅力が生物多様性の恵みに支えられていることを理解し、重要性を認識できる人や組織の形成を支援します

【主な施策】

- 生物多様性に支えられる食の理解を促進します
- 生物多様性に支えられる歴史・文化の理解を促進します

4. 基本的方向

■ 施策の基本的方向

基本的方向2 人と自然の環境を改めて考えながら生物多様性の保全

方向③: 海洋、島しょ、干潟、平野、丘陵、山地、河川など、ふくおかの多様な生物の生息環境を守るとともに、中心市街地や港湾地域においては、再生・復元を行い、山、川、平野、海のつながりを確保します

【主な施策】

- ・残された自然環境の保護・保全を推進します
- ・自然環境の再生・回復を推進します
- ・身近な生きものの保全を推進します
- ・自然景勝地や里地里山の景観など地域らしい風景の保全を推進します
- ・外来種による被害の未然防御を推進します
- ・ごみ対策や環境保全対策を推進します

方向④: 動物、水生生物、植物などふくおかの貴重な生きものを守り、豊かな生物相の回復を目指します

【主な施策】

- ・地域の貴重な生物の保全を推進します

4. 基本的方向

■ 施策の基本的方向

基本的方向3 生物多様性から享受される恵みの持続可能な利用

方向⑤: ふくおかの地理的特性を活かして生物多様性に配慮したまちづくりを推進します

【主な施策】

- ・ 市街地の生態系のつながりの回復・保全を推進します
- ・ 自然環境の再生・回復を推進します
- ・ 快適な都市環境の維持・向上を推進します

方向⑥: 安心して暮らせるふくおかの都市基盤をつくります

【主な施策】

- ・ 水害や土砂災害などを抑制する機能の維持・向上を推進します
- ・ 循環型の都市基盤の形成を推進します

方向⑦: 生物多様性の恵みを活かしてふくおかの魅力を増進します

【主な施策】

- ・ 生物多様性の恵みを活かしたふくおかの魅力増進を促進します
- ・ 適正な資源需給を実現して市域内の依存度の向上を促進します

4. 基本的方向

■ 施策の基本的方向

基本的方向4 生物多様性に支えられる文化の継承と創造

方向⑧: 生物多様性に育まれてきたふくおか固有の文化を継承します

【主な施策】

- ・ 食文化を支える産業の保全や人材の育成を推進します
- ・ 伝統文化や歴史資源等の保全、継承する人材の育成を推進します

方向⑨: 生物多様性の恵みを活かして新たなふくおかの文化を創造します

【主な施策】

- ・ 地域資源や立地特性を活かした新たな食の創出の支援を促進します
- ・ 身近な自然環境を活かした体験・学習の場や景観資源の整備・保全を推進します
- ・ 身近な自然環境の体験・学習・景観資源としての積極的活用を推進します

4. 基本的方向

■ 施策の基本的方向

基本的方向5 より広域な視野をもちながら地域の生物多様性を支える多様な主体や地域との連携

方向⑩: ふくおかの生物多様性を支える多様な主体、多様な地域との協力関係を構築し、連携した取り組みを推進します

【主な施策】

- ・市内の多様な主体間の協力関係を構築し連携を促進します
- ・市域外の地域や国際的な協力関係を構築し連携を推進します
- ・都市基盤を支える資源供給地域の生物多様性保全への貢献を促進します

方向⑪: ふくおかの生物多様性を支える多様な主体、多様な地域と連携していくための仕組みやルールを構築します

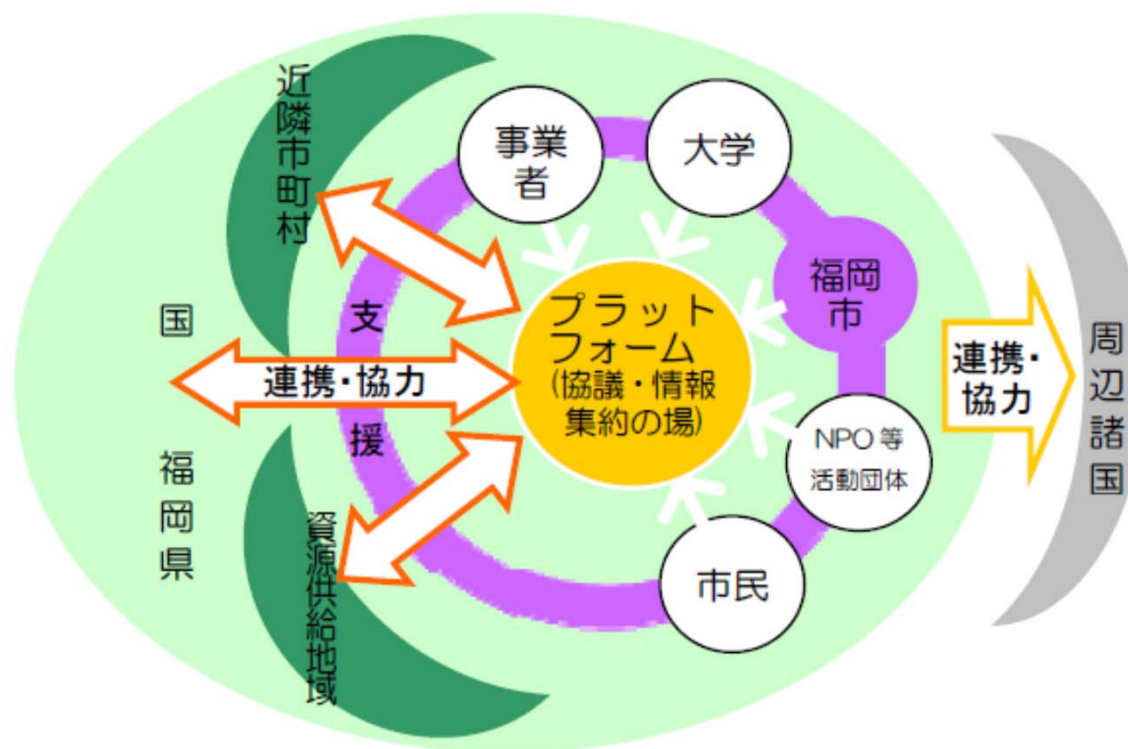
【主な施策】

- ・各主体の取組ルールや主体間の取り決めの整備を推進します
- ・生物多様性に関する情報を蓄積しその共有を推進します

5. 多様な主体との連携と進行管理

■ 多様な主体との連携

- ①市民、NPO 等活動団体、事業者、大学等研究機関など多様な主体との連携体制
- ②国、県、近隣市町村、周辺諸国との連携体制



■連携体制のイメージ

5. 多様な主体との連携と進行管理

■ 進行管理の考え方

○本戦略の目標の達成には、個別に各施策の取り組みを推進していくこと以上に、その進捗のバランスや調和が重要になると考えています。

○整理した各施策の進捗状況を踏まえ、「**基本的方向**」ごとの**取組状況を評価**し、新たに必要となる方向性などを検討して、次に取り組むべき施策を再整理し、戦略の目標の達成を目指していきます。

○まず、初期段階として、当初の10年間は、本市の基本計画や各行政計画に生物多様性の考え方が導入されることを目標とし、全体としては、長期間にわたって取り組みのバランスを維持しながら生物多様性のポテンシャルを高めていくことを、本戦略の進行管理の考え方とします。

■ 進行管理

○個別の行政計画に位置づけられた各施策について、今後作成する「**生物多様性ふくおか指標(仮称)**」に基づき、**進捗状況の継続的モニタリング**を行い、**毎年、施策の進捗を点検するとともに、必要な見直しを行います**。さらに、概ね10年ごとに「**基本的方向**」の評価を行うとともに、評価結果に基づいた見直しを行います。

5. 多様な主体との連携と進行管理

■ 生物多様性ふくおか指標（仮称）の作成

○生物多様性ふくおか戦略の推進にあたっては、本市の生物多様性の変化の状況を的確に把握する必要があるため、評価指標を作成する必要があります。

○評価指標は、従来の生物種や生息数などの自然環境調査に加え、農産物や文化など生態系サービスの維持に係わる社会的・経済的な観点も含めた総合的な指標を検討します。

【指標例】

○社会への浸透：生物多様性の認識度・講習会参加者数・環境保全活動団体数 など

○保全・利用：生物種・個体群の数・貴重生物の種数・個体数・公園等の利用者数 など

○生態系サービス：土地利用の改変率・雨水の実質浸透率・公園・保護区等の一人当たり面積 等

5. 多様な主体との連携と進行管理

■ 進行管理の流れ

1) 進捗状況の継続的モニタリング

○生物多様性ふくおか指標(仮称)に基づく評価に必要な情報を本戦略の所管部署が中心となって、継続的なモニタリングを行います。

2)「施策(取り組み)」の点検及び見直し検討(毎年)

○モニタリング結果に基づき、毎年、施策(取り組み)の進捗状況を点検します。

○点検結果を踏まえ、必要に応じて施策の追加や見直しを行います。

3)「基本的方向」の評価及び見直し検討(概ね10 年ごと)

○概ね 10 年ごとに「基本的方向」ごとの取組状況を生物多様性ふくおか指標(仮称)に基づいて評価し、評価結果を、多様な主体による会議に報告し、意見を聴取した上で、次の10 年間の「基本的方向」を検討します。